

## プロローグ

鬱蒼うつそうと草が生い茂っていた。以前とはまったく変わってしまった。そこにあるはずの家がない……。

杉山すぎやま加奈子かなこは呆然と立ち尽くしていた。まるで異世界に踏み込んだように、今ある現状が信じられなかった。

ここへ来れば家族が迎えてくれるはずだった。母が真っ先に飛び出してくて「よかったね」と抱きしめてくれるはずだったのだ。彼女はそれを想

像していた。

だが現実は大きく違っていた。生まれ育った我が家がなくなっていることなんて想像もしなかった。

その周辺もずいぶん変わってしまった。目の前の道路は広くなり、見たこともない近代的な住宅がそこかしこに目についた。昔からある家が何世帯あるのだろうか？

一瞬、道を間違えたのかと何度も自分を疑った。でも間違いないのだ。幼いころの記憶だが、目印になる建物ははつきりと覚えている。たしかに知らない道もできていた。以前はなかった建物もあるが、絶対この場所に間違いないのだ。

お隣さんの家も新しくなっていた。そして表札も別名だった。隣近所の人には知らない人ばかりだ。過去のことを聞くこともできない。

せっかくあの部屋から逃げてきたのに――。

やつとのことどこまで辿りつけたのに、こんな残酷な現実が待っているなんて……。途轍もない絶望が彼女を襲っていた。

加奈子の後ろを一台の車が通り過ぎて行った。車内から運転手がこちらを見ていたが、そのまま通り過ぎてしまった。この辺りに住んでいる人だろうか。

街の風景もすっかり変わっていて、十二年の長さを感じさせた。

加奈子は十二年ぶりに我が家に帰ってきた。だが目の前に家はなかった。その家は取り壊されて、一面に草が生い茂っているだけだった。

父と母に会いたい……。温かい家族の団欒をもう一度味わいたい。一つ屋根の下で泣いたり笑ったり、あのころのように楽しい日々を送りたい。

お父さん……。お母さん……。

優しかった両親のことを思い出すと涙が溢れてきた。どんなに泣いてもハンカチを差し出してくれる人もいなかった。

薄汚れた白くみすばらしいトレーナーの袖で涙を拭いた。その上にはブルゾンを羽織っている。

手持ちの現金は一円もない。これからどうしよう……。

ここへ戻ってくれば、生活の心配はないと思っていたのだ。食事を出してくれて、熱い風呂に入れてくれ、柔らかい布団の上に寝かせてくれる。そう思っていたのだ。それなのにこの現実……。

家族はどうしてしまったのだろうか？ 父も母も姉も、どこかへ引越してしまったのだろうか。

仕方なく加奈子は歩き出した。どこ行く当てもない。元氣なくとぼとぼと歩いていると児童公園を見つけた。小さいころよく遊んだ公園だ。そこ

に入つてベンチに腰を下ろした。

そして頭を抱え込む。なすすべはなく途方に暮れるばかりだった。

もしかしたら自分は死んだと思われているのだろうか？ その可能性は十分にあった。

あれは十二年前のことだった――。

彼女は学校からの帰り道、一人で歩いているところを、いきなり後ろからハンカチのようなもので口を塞がれて、眠らされた。

ただただ驚くばかりで声も出せなかった。相手の顔など見る余裕もない。初めてのことに何が何だか分からなかったのだ。想像を絶することだった。気がついたら、どこかの部屋の中に連れ込まれていた――。

すぐに家に帰れると思っていたが、それから十二年もの長い間、拉致監禁されていた。

